2017年度　　EA

国　　語

注　意

1. 問題は全部で13ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

探偵小説は、その性質上、犯人の「内面」が直截描かれる機会が少ないために、個別の「罪」の問題はどうしてもステレオタイプ（紋切り型）化されて取り扱われることになる。「人はみな誰もが罪を負っている」という共通の、そして［　A　］が先行する。それゆえ犯罪行為は、常にある一定の普遍的出来事として、誰もが承認できる半ば記号化されたものとして処理されねばならない。たとえどのように残虐な事件でも、そこには理にかなった動機が必要だ。犯人の「内面」は、われわれ読者が了解可能な[a]合理性の範疇に属していなければならないのである。たとえ犯人が異常性格者であったとしても、だ。

だがその結果、犯人の「罪」は制度としての「法」によってしか裁かれないことになる。ドストエフスキーの『罪と罰』が探偵小説でありえないのは、作者が、法制度によって裁かれる犯人の末路を、作品の到達目標と考えなかったことに[b]キインしている。『罪と罰』の作者は、事件が鮮やかに解決される劇的な場面をめざしたのではなく、あくまでも犯罪によって生じた[c]「罪」の概念を、実存的に掘り下げていくことをめざしていたからである。それに比べ、探偵小説は、「罪」の実存的な掘り下げを課題にするというよりも、「罪」が現実社会との関係性――構図のなかで、どのように位置づけられるかをもっぱら話柄（課題）にする。どのように衝撃的なのか、どのように異常なのか、どのようにそこには見えない動機がじつは隠れていたのか、が「読み」の前提となる。だから犯人の苦悩も狂気も、孤独も、昏迷も、すべてがわれわれ読者にとって理詰めで解釈されるものでなければならない。換言すれば、[d]犯人の「内面」は、不条理の壁をぎりぎりまで登りつめることはあっても、決してそれを向こう側に乗り越えてはならない、ということだ。

ところが太宰治は、「女の決闘」において、次に引く*ヴィリエ・ド・リラダンの洒脱な挿話をもちいながら、その不条理の高い壁を性急に乗り越えようと試みる。

――リュシエンヌよ、私は或る声楽家を知っていた。彼が許嫁の死の床に侍して、その臨終に立会った時、傍らに、彼の

許嫁の妹が身を慄わせ、声をあげて泣きむせぶのを聴きつつ、彼は心から許嫁の死を悲しみながらも、許嫁の妹の涕泣に発声法上の欠陥のある事に気づいて、その涕泣に迫力を添えるには適度の訓練を必要とするのではなかろうか。と不図考えたのであった。而もこの声楽家は、許嫁との死別の悲しみに堪えずしてその後間もなく死んでしまったが、許嫁の妹は、世間の掟に従って、忌の果てには、心置きなく喪服を脱いだのであった。

e どうして余人に、当事者(声楽家)の苦悩が測り知れるであろう。肉親(妹)であっても「忌の果て」には、けろりとなにごともなかったように生きていける。あれほどの愛を誓った許嫁を先立たせたのは、そこにどんな事情が絡んでいたとしても——病気であろうとも——やはり彼個人にとっての「罪」なのだ。それは、彼だけに訪れる個別の「罪」であり、余人と共有(共感)できるそれでは断じてない。*キェルケゴールも次のようにいっている。

罪を思考の対象にすることはできるだろう。けれども個別的な罪びとは思考の対象にはならない。それだからこそ、罪が単に思考の対象とされるときには、罪を真剣に問題にすることができないわけである。真剣な問題になるのは、罪一般ではなくて、君が、そして私が罪びとであるということである。

「罪一般」として考えれば、婚約者の声楽家はそのとき気が変になっていたのではないか、あるいは彼は、じつは彼女のことをそれほど深くは愛していなかったのではないか、または［ B ］、などと「余人」から解釈(分析)されるのだろう。平均値を好む「余人」とは、常にそのようなものである。だから*デュボアが次のようにいったとしても、探偵小説というジャンルはやはり(じつはデュボア自身もあとで付け加えているように)「罪」の問題を実存的に掘り下げることを可能にはしていない。すべての「罪」にまつわる主体的・倫理的な課題は「先送りされ」、境界線のぎりぎりまで近づくことはあっても、すぐにそこから——不条理の辺土から——立ち退きを命ぜられてしまうのである。

探偵小説の解明＝発見型の語りは、アイデンティティを問題にし、個人を罪へと直面させ、その死と戯れるがゆえに、存在とその本質にかかわる古くからの存在論的な問いを再び取り上げ、その存在の安定性をめぐるより現代的なまなざしにつながっていく。

「常識」の側に立てば、「罪」の課題の個別性などは、社会契約的な相関の図式に還元されるもの以外はみな一笑に付されてしまうに相違ない。「アイデンティティ」も、たしかに「問題に」はされるだろうが、それはほとんど骨抜きの中心性を欠いた思考において、かりそめに弁じられるのが落ちだ。「探偵小説というモダンのテクストは、司法機関の存在をタンポ[f]として、悪Malを過失Fauteへと置きかえ、その形象をそっけなく簡略化されたものとして描き出す」(デュボア)。この世の「悪」は、もはや昔日の悪Malではなく法制度によってのみ裁かれる悪Fauteへと変じてしまった。「人間失格」のなかで太宰もいっている。「罪の対義語が、法律とは！　しかし、世間の人たちは、みんなそれくらい簡単に考えて澄まして暮らしているのかも知れません。刑事[g]のいないところにこそ罪がうごめいている、と」『悪と罪とは違うのかい？』『違う、と思う。善悪の概念は人間が作ったものだ。人間が勝手に作った道徳の言葉だ』」

明らかに太宰は、ここでキリスト者としての「罪」の課題を意識している。

表現主義芸術が、「原始キリスト教」を範として世俗的教会制度を否定し、また物質主義・機械文明を嫌忌し「内面」性の深化へと向かったように、太宰もまた一九三六年のキリスト者内村鑑三*(の著書)との出合い以来、『聖書』を耽読し教会主義を否定し、「内面」的な「罪」の意識の深化へと向かっていった(付記すれば、もともと太宰が青年のころに愛したカンディンスキーの画集も、その大部分はわれわれがいま想像するような幾何学的抽象絵画ではなく、原始キリスト教を想起させる汎神論的な神秘世界を画題(テーマ)とした宗教画であった)。

その発端は、むろん鎌倉の海でのあの心中事件*(一九三〇年)にたどることができる。この事件を引き起こした当時の彼は、事件を追及する刑事(法の代理人)たちを前にして、おそらく真相を「告白」(自供)することはできなかったであろう。そして、なに

よりも津島家の権勢が、法の裁きを無効化してしまったであろうその時点から、彼の深切な「罪」の意識は胎動しはじめ、また、さらに薬物中毒で精神病院に強制入院させられた「人間失格」の経験（一九三六年）が、真実の「告白」（告解）への道を彼に準備させたにちがいない。カントいわく、「過ちを犯した時、実際彼は自由であり、これをやめることもできたはずだということに一旦彼自身気づいてしまったら、どんなに彼に有利なように語る弁護人も、彼自身の内なる原告を黙らせることはできない」。

かつて女を死に至らしめた男の「罪」は、神のみがその裁きを下せるものであったはずだ（繰り返すが「法」は無力だった）。ましてや、その「罪」を「罪一般」の問題として、思弁をもちいて真率な「告白」（自己暴露）へと至らせる術など彼にはなかったといえるだろう。あくまでも真のキリスト者＝「単独者」にとって、「罪」は個別の課題として意識されたときにこそ、初めて「真剣な問題に」なりえるからだ。戦時中、太宰は弟子の小山清に「若し神がいなかったら、僕達が人知れずした悪事は一体誰が見ているのだ」と真剣な口調で語ったというが、この言葉を彼自身の心中体験と照らし合わせて考えれば、彼が「罪」概念の普遍的な解釈をではなく、その不可侵の個別性をこそ追求していたこと、科学的な因果律では導きえない実存の究極の深みをこそ切望していたことがうかがえるのである。

（吉田司雄「探偵小説と日本近代」による）

［注］

＊ヴィリエ・ド・リラダン（１８３８～１８８９）…フランスの小説家。

＊キェルケゴール（１８１３～１８５５）…デンマークの哲学者。

＊デュボア（１９３３～）…フランス文学の研究家・評論家。

＊内村鑑三（１８６１～１９３０）…宗教家・評論家。キリスト教者として多くの青年に影響をあたえた。

＊心中事件…太宰と田部あつみとの心中事件。あつみは死亡し太宰は生き残った。

＊津島家…太宰の実家（太宰の本名は津島修治）。津軽の素封家で、太宰の心中事件をもみ消した。

＊カント（１７２４～１８０４）…ドイツの哲学者。

問一　空欄 A に入れるのに最適な語句を、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① 不可解な謎　② 慈悲の眼差し　③ 混乱した真実　④ 先入観の否定　⑤ 暗黙の了解

問二　傍線部a「合理性」と異なる意味合いで用いられている本文中の語を、次の①～⑤より一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2 。

① 理詰め　② 不条理　③ 平均値　④ 常識　⑤ 法制度

問三　傍線部b「キイン」を漢字で記せ。**問三は解答用紙(その2)を使用。**

問四　傍線部c「「罪」の概念を、実存的に掘り下げていくことをめざしていた」の説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① ステレオタイプになりがちな探偵小説に、残虐な動機や異常性格などの要素を取り入れ、差別化を試みようとした。

② 個別の「罪」の概念を、誰もが理解できる一般論へと解釈し直し、文学の次元で作品化しようとした。

③ 余人の世界からかけ離れた衝撃的で異常な「罪」であっても、合理性の範疇に引き戻しそれを罰しようとした。

④ 「罪」の本質を法制度レベルで処理せず、その奥の犯罪者の個別的な苦悩まで突き詰めて解釈しようとした。

⑤ 現実存在としての犯人に焦点をあて、その人間性の複雑さから事件の謎を理詰めで解き明かそうとした。

問五　傍線部d「犯人の「内面」は、不条理の壁をぎりぎりまで登りつめることはあっても、決してそれを向こう側に乗り越えてはならない」とはどういう意味か。説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① 犯罪者の内面は不可解なものであり、その犯行動機をどこまでも追及していては、途中で読者の興味を失わせて、探偵小説としては失敗に終わるということ。

② 探偵小説においては、犯人の犯行動機を誰もが納得する常識の範囲で解明すべきであり、犯人の説明しがたい内面にまで踏み込んではならないということ。

③ 「罪」を法制度のなかで決着させるのが探偵小説の領分であって、犯人にどんな「罰」をあたえるかは個々の読者の問題だということ。

④ 犯人の実存的な苦悩を解明するのには、彼の不条理な人間性を明らかにすれば十分であり、それ以上の理解はもはや不要だということ。

⑤ 「罪」の持つ個別性は、社会契約的な相関の図式に還元できるもの以外、一般人には興味がないのだから、探偵小説は逆に彼等の意表を突かねばならないということ。

問六　傍線部e「どうして余人に、当事者(声楽家)の苦悩が測り知れるであろう」とあるがそれはなぜか。説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 当事者と同じ境遇に身を置かなければその心が察知できないほど、人間は愚かしい存在であるから。

② 深い苦しみに直面した時、人間は理性を失ってしまうため、だれも当事者の精神を理解できないものだから。

③ 一般に人は当事者の錯綜した深い心理的な悩みまでは理解できず、平凡な常識の範囲で判断してしまうものだから。

④ 余人は犯された罪そのものよりも、罪を犯した当事者の個別な心理の方に興味を抱きがちなものだから。

⑤ 人は自ら背負っている原罪に気づかず、他者の犯した罪に対する罰のことばかりを考えようとするものだから。

問七　空欄 B に入れるのに最適な語句を、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 不謹慎だ　② 正直者だ　③ 仕方のないことだ
④ 人情の自然だ　⑤ 予想通りだ

問八　傍線部f「タンポ」を漢字で記せ。**問八は解答用紙(その2)を使用。**

問九　傍線部g「刑事のいないところにこそ罪がうごめいている」とはどういう意味か。説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 法制度の網をくぐり抜けるようなところにこそ、罪がうまれるものだということ。
② 本当の意味での罪とは、法律で解決できないさらに深い次元にこそあるものだということ。
③ たとえ警察が罪に対処しても、またすぐに新しい罪が世間に広がるものだということ。
④ 警察が犯罪者をとらえても、善悪の概念で彼を処罰し改心させるわけではないということ。
⑤ 人の見ているところでさえ、知らないうちに犯罪が成立してしまっているものだということ。

問十　傍線部h「どんなに彼に有利なように語る弁護人も、彼自身の内なる原告を黙らせることはできない」とはどういう意味か。説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 無自覚な犯罪者にとって、弁護によって罪が軽減されても裁判制度が本当に機能したとはいえないということ。
② 弁護というものは部外者によってなされるもので、けっきょく十分な犯罪解明がされるわけではないということ。
③ 犯罪者を裁ける存在は唯一被害者のみであって、法制度そのものにはじめから矛盾があるということ。
④ 弁護されねばならない存在であるという時点で、そもそも被告に完全な無罪というものはありえないということ。
⑤ 本当の罪の意識は当事者のみが真に知っているものであり、法制度によってそれが軽くなるものではないということ。

問十一　傍線部i「若し神がいなかったら、僕達が人知れずした悪事は一体誰が見ているのだ」とはどのような意味か。最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① どんなささいな罪であれ誰かに被害は及んでおり、裁判になることがなくても神だけは当事者を相応に裁いているのだという意味。

② 他人の目は逃れたとしても、被害者は現にいるのであり、その思いは必ず神にとどいて、いつか加害者は罰せられるのだという意味。

③ 法にふれるかどうか以前に、人はそもそも罪を犯して生きている存在であり、それを自覚した個人を裁き得るのは神だけなのだという意味。

④ 科学的な因果律によって罪の原因を異常なものとして安易に解釈せず、加害者の心に人は耳を傾けねばならないという意味。

⑤ 裁く者も裁かれる者も等しく罪深い人間であるということを忘れてしまうと、人は公正な神の啓示を見失ってしまうという意味。

問十二　太宰治の作品を次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① ヴィヨンの妻　② 暗夜行路　③ 地獄変　④ 明暗　⑤ 痴人の愛

二　次の文章は、まず世間に流布している「俗説」を引いた後、「今按ずるに」として自分の意見を述べたものである。読んで後の問に答えよ。

俗説に云はく、中ごろ、ある士、浪々の身となりて、本国に老母ばかりを残し置き、他国にいたり奉公しければ、母を迎へむがため、本国に帰るに、道のかたはらに、盗人なりとて、木にしばりつけて面をさらすものあり。立ちよりて見れば、おのが母なり。かの士、いかにもしてたすけ[A]と思案をめぐらせども、せんかたなし。この上は、他手にかけて盗人の名をヨモにあらはさんより、我が手にかけて跡をとぶらはんと思ひ、刀をぬいて、あたりに付き居たる番人どもをきりはらひ、母が首を取りて逃げ去りたり。追ひ散らされたる番人ども、もとのところにかへりて盗人を見るに、首無ければ、体ばかりを刑におこなふといへども、首無くして、誰といふことをしらず。

かの士は、母が首をひそかに葬り、主人が方に帰りて、あらましを相のべ、「子として母が首をきる、不孝の罪のがれがたし。かかる不孝の身をもつて、君につかふべき様なし。いとまをたまはらば、出家して母が後世をいのりたし」と申しければ、主君聞きて、「汝が所為、孝行の至極なり。母を生けて恥をさらさせんよりは、首を切りて名をかくし、恥をおほふこころざし、器量、世の常に抜群せり」と、大いに称美せられ、そのままにて仕官しぬ。そのころ、忠孝兼備の士と、とりざたしけるとかや。

今按ずるに、この士が所為、言語に及びがたし。その故は、昔、宋の徽州の鮑寿孫といふ者の父、賊のためにとらはる。賊、かれを樹にしばりつけて殺さんとする時、鮑寿孫、来たり拝して、父が死にかはらんことをねがふ。賊あはれみて、二人ながら命を助けたり。これをもつて思ふに、右の士も、母がからめられたるを見ば、すすんでその刑にかはりて死せざるや。親のためには、名をも恥をも命をもかへりみるべき事かは。然るを、情けなく親を切りて名を隠し、恥を覆はんとはかる。その罪悪、五刑に処してもあきたるべからず。もろこしにて、呉起が、己が母を葬る所に至り、よそに見て退きしをだに、白楽天は、烏の反哺に劣れりとて、「昔、呉起といふ者有り。母没して喪に臨まず。嗟しいかな、この徒輩。その心、禽にだにも

B 」と賦せり。もし母を切りし者を見せば、梟鳥に等しとそしるべし。かかる大罪人を、孝子とほめて使へるも不思議なり。変にのぞみ難に及ぶ時は、必ず主君の首をも切りかねまじきくせものなり。おそるべし、にくむべし。

（井沢蟠龍『広益俗説弁』より）

［注］

＊徽州…中国の地名。現在の安徽省に位置する。

＊鮑寿孫…宋代末期、徽州の人。

＊五刑…中国の刑罰体系でいう五種類の刑罰。

＊呉起…中国春秋時代の兵法家。『呉子』の著作で知られる。

＊白楽天…中国、唐の時代の詩人。以下に引用される詩は、『白氏文集』巻一「慈烏夜啼詩」。

＊烏の反哺…烏のひなが成長してから、親烏に食物をくわえ与えて養育の恩に報いること。

問一　空欄 A に入れる言葉として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① ばや　② べし　③ たり　④ らむ　⑤ ざらむ

問二　傍線部1「ヨモ」に漢字をあてるとすれば、どのような字がよいか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① 世面　② 余模　③ 広間　④ 四方　⑤ 代母

問三　傍線部2「我が手にかけて跡をとぶらはん」とはどういう意味か。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 13 。

① 母の首は私が持ち去って、その後ていねいに供養しよう
② 母を救うことはできないが、いつか再びここを訪れよう
③ 私が自分で葬送することにより、母の恥を隠そう
④ 私が母の手を取って、その最期をみとろう
⑤ 私の手で母を殺して、葬送や供養をしよう

問四　傍線部3「至極」の「極」と同じ読みになる「極」を含む熟語として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 14 。

① 極力　② 極端　③ 極致　④ 極刑　⑤ 極意

問五　傍線部4「とりざたしけるとかや」の意味として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 15 。

① 議論の的になったようだ
② 評判になったようだ
③ 批判を浴びたようだ
④ うらやまれたようだ
⑤ ありもしない噂を呼んだようだ

問六　傍線部5「言語に及びがたし」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 16 。

① 言葉では表現できないほどすばらしいことだ
② 言葉にするまでもない、単純明快なことだ
③ 言葉で言い表せないほど悪いことだ
④ 一言で決めつけるのはおかしいことだ
⑤ 良いか悪いか、すぐには判断できないことだ

問七　傍線部6「死せざるや」の意味として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 17 。

① あるいは死なない方がよかったのだろうか、いや、そうではないだろう
② 死ななかったのは、よいことだったのだろうか、わからない
③ なぜ死んでしまったのか、死ぬべきではなかったのだ
④ どうして死ななかったのか、死ぬべきだったのだ
⑤ 死んでしまうべきだったのだろうか、疑問だ

問八　空欄 B に入れる言葉として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

① しかず　② おはず　③ ならず　④ いはず　⑤ やまず

問九　傍線部7「切りかねまじき」の意味として、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

① 切ることなどあり得ない
② 切らないとも限らない
③ 切るとは限らない
④ 切るとは思えない
⑤ 切るに違いない

問十　この文章の内容に合う文として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① 世間の俗説では、この武士が母の首を奪い、ひそかに葬ったことを、母の恥を隠す孝行であったと評価している。しかし、作者の意見では、親の名誉や恥を気にするのは孝行の道から外れるので、この武士の行為は孝行とはいえない。
② 世間の俗説では、この武士が母の恥を隠した孝行こそ、何よりも評価されるべきであるとしている。しかし、作者の意見では、孝行も重要だが、何か事件が起きた時に主君を守ることこそが、武士にとっては最も重要なのである。
③ 世間の俗説では、この武士が母を殺害してでもその恥を隠した孝行を評価するあまり、忠義をも兼ね備えていると評価している。しかし、作者の意見では、母への孝行は認められるとしても、主君への忠義は認められない。
④ 世間の俗説では、この武士は母を殺したけれども、その恥を隠したのだから孝行であったと評価している。しかし、作者の意見では、母を殺すなどということは絶対にしてはならないのであり、この武士を賞賛するのは誤りである。
⑤ 世間の俗説では、この武士は母の命を助けることには失敗したが、その死後を弔った手腕がすばらしかったと評価している。しかし、作者の意見では、母の命を助けるために自分の命を捨てることこそが、何よりも尊い行為なのである。